
猫の妖精 ～ケット・シーの王国～

黒猫時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の妖精　くケット・シーの王国く

【Nコード】

N3604P

【作者名】

黒猫時計

【あらすじ】

ある一匹の飼い猫の、不思議な不思議な物語。

北欧の国の、とある民家で飼われている一匹の黒猫。彼は迷い猫だった。おじいさんに拾われ居場所が出来た。ゆっくりとした時間が流れる日々……。

そんなある日、彼はあることがきっかけで猫の王国に行くことに！
？

そこでは思いもよらなかった事実を知ることになる。様々な出会いと別れが彼を成長させていく。はたしてその行方は？

ブローグ

猫は喋ります――

猫は二本足で歩きます――

猫は人語を解します――

『ケット・シー』と呼ばれる猫の妖精。彼らは人の中に紛れて日々生活しています。

彼らは人が見ていない間、二足で立ち、人語を話して集会を開き、情報交換をしています。

しかし、これは何も珍しいことではありません。彼らにとっては、ごく当たり前のことなのです。

ほら、あなたのすぐ傍でくつろいでいるその猫ちゃんも、普段よく見かける野良ちゃんも……

もしかしたら、ケット・シーかもしれないですよ？

ケット・シー

雪が降り積もり、見渡す限りの一面を銀世界へと変えている、こは北欧のどこかにある、とある民家。あまり大きくはないけれど、ログハウス風な素敵なお家。

おじいさんとおばあさんが、二人仲良く暮らしています。

おじいさんは、暖炉の側に置かれた椅子に、ゆったりと腰掛けながら読書……パイプをくわえています。おばあさんは、テーブルに向かつて編み物をしています。……葉巻は……くわえています。そしてもう一人……一匹？ いえいえ、一人でいいんです。暖炉の前で丸くなっているのは、このお家で飼われている黒猫。

胸には、真っ白で立派なお洒落な襟巻き。尻尾は長く、その先端には飾り毛があり、精悍な顔つきをしています。

彼の名前はヨハン。おじいさんが名前を付けてくれたそうです。

ヨハンはゆっくりと体を起こし、一度大きく伸びをするとおじいさんに挨拶。

「にゃ〜」

「そうかヨハン、散歩に出掛けるんだね」

おじいさんはそう言うのと窓の方へと歩いていき、ガラガラガラ、と窓を開けてくれました。

それと同時に、外の冷たい空気が家の中へと入り込んだので、おばあさんは身震いしています。

「今夜は冷えそうだからね、あまり遅くならない内に帰ってくるんだよ」

「にゃ〜お」

ヨハンはおじいさんに返事をして、開け放たれた窓の外へと飛び出しました。

外の空気はとても冷たく、自慢のヒゲが凍ってしまいそうです。行き先もまだ決めていないけれど、ヨハンはとりあえず歩き始めました。

——サクツサクツサクツサクツ。

道路に積もった雪を踏むたびに愉快的音がします。

軽快な足取りで歩いていると、ヨハンは氷の張った池を見つけました。

のぞき込むと、まるで鏡のようにヨハンの顔が映っています。

よく見るとヒゲ同士がくっ付いていたので、ヨハンは顔を洗いました。

顔を洗いスッキリしたヨハンは、久し振りに隣町まで行くことに決めました。自宅から隣町まではそれほど離れてなく、人間の足で歩いて6、7分の所にあります。

途中、小川に架かる小さな橋の上を歩いていると——

「にゃあゝおおゝ」

と、一匹の猫に声をかけられました。それにしても野太い声です。よく見てみると、黒と白の毛の模様がまるで牛のような、少し太り気味の猫は手招きをしています。どうやら付いて来るようにと誘っている様子。

少しくらい寄り道をしていいだろうと思ったヨハンは、歩き出すメタボ気味の牛猫に、付いていくことにしました。

橋を渡ると牛猫は、住宅の方へと歩き出します。

住宅街へ入ると、民家と民家の隙間を通り路地裏へ。路地裏を道なりに進むと、次は石垣を登りました。そうして石畳の道路をしばらく歩くと、やがて小さな公園に着きました。

牛猫はその公園の奥へと歩いていったので、ヨハンはそれに付いていくと、積もった雪にポツカリと穴が開いているのが見えました。その少し手前で牛猫はちよつと振り返り、ヨハンの姿を確認するとトンネルの中へと入っていきました。ヨハンはトンネルをのぞき込むと、向こうから少し光が漏れているのが見えます。

少し戸惑いながらも、ヨハンは意を決してトンネルの中へと入っていきました。

トンネルの中は薄暗く、猫一匹入るのがやっとの狭さです。さっきまでいた外とは違い、中はぜんぜん寒くありませんでした。

先ほどの牛猫は、もうトンネルを抜けてしまったのか姿がありません。ヨハンは急いで光の方へと駆け出します。そして光を抜けると――。

そこはさっきまでいた銀世界ではなく、一面が緑に覆われた自然豊かな空間でした。

緑の匂い、木々の擦れる音、優しい木漏れ日、吹き抜ける爽やかな風。

（ここは何かが違う）

ヨハンは空気が変わったのを感じ、それと同時に、なんだか懐かしくも感じました。

目の前には牛猫の姿があります。どうやら待っていてくれたようです。

ヨハンをジッと見つめる牛猫。すると突然――

「じゃあ」

と、一言。ヨハンに声をかけるとまた歩き出しました。
てくてくと牛猫に付いてしばらく歩いていくと、やがて大きな木
が見えてきました。その根元には、数匹の猫が集まっています。

ぶち猫や三毛猫、白猫と黒猫、虎猫にマーブル……。

その様はまるで、芝生という名のパレットの上に乗せられた、絵
の具のように鮮やかです。

しかし、そんな事を思ったのも束の間。

(……!!)

驚くことに、彼らは二本足で立っているではありませんか。相対
するまでの距離、約数メートルの所でヨハンは立ち止まりました。
すると――、

「何をそんなに驚いているんだ？」

少し低めの声が聞こえてきました。なんとなく聞いたことのある
ようなトーンです。……ですが、辺りを見渡しても人の姿は見当た
りません。

キョロキョロと周囲を見ていたヨハンでしたが、その顔を正面に
戻した瞬間、驚愕しました。

(——!!)

なんとなんと、さっきまで道案内をしていた牛猫……もとい牛の
様な模様をした猫が、二本足で立っているではありませんか。

「そんなに驚くことないだろう？ ……自己紹介がまだだったな、
俺はモウってんだ。よろしくな！」

(……やっぱり?)

ヨハンは心の中で思いました。……いえ、そんなことは正直どうでもいいのです。

なぜ猫が二足で立ち、そして人語を話しているのか……猫であるヨハンにも、さっぱり意味が分かりません。

そんなことをあれこれ考えている内に、モウは集団の中でも特に目を引く、知的な感じの真っ白で綺麗な毛並みをした猫の元へと歩いていきました。

「あらモウ、もう帰ってきたの? ……候補になりそうな男性は見つかったのかしら?」

「ああ。そこまで連れて来たんだが……どうも俺達を見るのは初めてらしいんだよな」

と、モウはヨハンの方へ向き直ると、白猫もヨハンの方を見ました。

「まあ、あなたが候補の方ね! こっちにいらっしやい」

白猫は手招きをしてヨハンを呼んでいます。ヨハンは恐る恐る、その白猫へ近付いていきました。

「……うん! ……モウ、この子イケるじゃない!」

白猫はヨハンの顔、そして毛並みや毛艶を見ると、嬉しそうに手を叩きました。

「ところであなた、ケット・シーを見るのは初めてなのよね?」

「にゃう」

「そう……あつ！ 自己紹介がまだだったわね。 私はリリーよ、よろしくね！」

ヨハンは小さくお辞儀をしました。そしてリリーは話を続けます。

「ケット・シーを見たのは初めてって言うけれど、あなただって立派なケット・シーなのよ？ ……匂いで分かるわ」

とリリーは、ヨハンの匂いを確かめるように言いました。

ヨハンは言っていることがよく分からず、首を傾げています。

「だから、あなたもケット・シーなんだってば！ ほら、勇気を出して立ち上がってみて！ ……こつよ」

そう言うとりりーは、ヨハんに立ち上がるお手本を見せました。

「……やってみて！」

半信半疑ながら、ヨハンは勇気を出して立ち上がってみると——
なんと！ 二本足で立つことが出来たのです。

「な、何にゃ！ 何にゃことにゃ！」

……ついでに言葉も喋れました。

「まあすごいわ！ 一度に二つも習得できるなんて。物覚えが良くて助かるわ。……どこかの誰かさんとは大違いね……ねえ牛さん？」

リリーは少し意地悪に、モウに向かって言いました。

「ふん！ 俺は牛じゃねえよ！ ……でも、言葉はもう少し練習が必要みたいだな」

「そうね、まあこの子なら30分もしない内にマスター出来るでしょ！ ……あ、まだ名前聞いてなかったわね」

ヨハンは名を聞かれたので、自己紹介をしました。

「僕のにはにゃハんにゃス！」

『……ニヤハンニヤス？』

リリーとモウは顔を見合わせて笑いました。

「やっぱり、ちゃんと言葉を教えてから聞いた方がよくないか？」

「そ、そうね……よし、これから猛特訓するわよ！」

ヨハンは、リリーとモウに厳しい特訓を受けました。……人語を喋るための。

——そして20分後——

「……さ、あなたの名前を聞かせて！」

リリーは微笑みながら言いました。

「僕の名前はヨハンです。こんなに上手に話せるようにしてくれてありがとう、リリーさん、モウさん！」

ヨハンはよほど嬉しかったのか、丁寧にもお辞儀をしました。

「よせやい！ モウ“さん”なんて、照れるだろうよ、ガラでもない……モウでいいよ」

「私も……リリーで、いいわよ」

リリーとモウは少し照れながら言いました。二人揃って顔を洗っています。

「うん！ ありがとう、リリー、モウ。……ところでさっき候補つて言つてたけど、あれは何だったの？」

ヨハンは、さっきからずっと気になっていた疑問を二人に投げかけました。

しかし、リリーとモウは少し渋っています。

「……次の満月の夜、またここで今日のような集会があるわ、その時になったら教えてあげる」

「そうだな……今日はもう遅いし、あつちは雪が降ってきたみたいだ。……そろそろお開きにするか！ みんな、今日は解散だ！」

モウがそう言うと、集まっていた猫達はみんな一斉に、自分の家のある方向へと走っていきました。

ある者は茂みの奥へ、またある者は、つい先程ヨハンとモウが通ってきたトンネルへ――。

「じゃあヨハン、また今度ね！」

リリーはそう言うと、ヨハンに手を振り森の奥へと走っていきました。リリーの後ろ姿を見送ると、あぐらをかいていたモウはスツと立ち上がり――、

「よし、そろそろ帰るか、ヨハン！」

と言いました。

「うん。……ところでモウ、またあのトンネルを通るんだよね？」

ヨハンはトンネルを指差して聞きました。

「ん？ ああそうだ、あのトンネルがコッチの世界と繋がってるかなあ。まあ他にもいくつかあるみたいだが、あれが一番家からも近いと思うぞ……。あ、そうそう。向こうに着いたらまた普通の猫に戻れよ。二足歩行なんてしてたら、人間がビックリしちゃうからなあ」

モウはおどけた様子でケラケラと笑っています。

「分かった！ ……それとコッチの世界って？」

「うん。……まあ簡単に言えば、俺たちケット・シーの為の世界ってやつかな？ ……そんなことより、早く帰るぞ。吹雪になるかもしれない」

二人はトンネルをくぐり抜け、元の銀世界へと戻ってきました。

すると、トンネルは自動的に閉まりました。どうやらケット・シーが近づくと開き、出て行くと閉じるようです。

——雪はしんと、静かに降り注いでいます。

二人して空を見上げ、そして公園を出て行きました。街を出てしばらく歩いた二人は、最初に出会った小川に架かる小さな橋まできました。

「今夜は根雪になりそうだな。……風邪ひくなよ、ヨハン！」

「モウもね！」

「ああ。……そうだヨハン、今度の満月もここで落ち合おう。それじゃあまたな！」

「うん、バイバイ！」

二人は別れると、それぞれの家へと帰っていききました。

今日は色々なことがありました。起きた出来事を、頭の中で整理しながら帰っていると、いつの間にかログハウス風の自宅の前まで着いていました。

ヨハンは窓をカリカリと引っ掻くと、おじいさんが窓を開けてくれました。

「お帰りヨハン、散歩は楽しかったかい？」

「にゃーお」

おじいさんに返事をする、ヨハンは暖炉の前まで歩いていき、体に付いた雪をブルブルと払い落として、お気に入りの場所で再び丸くなりました。

「ヨハン、今ばあさんがご飯を作っているからね……もう少し待っているんだよ」

おじいさんは優しく微笑むと、夕食を作っているおばあさんのお手伝いに行きました。

それからしばらくすると、どうやら夕食が出来上がったようです。

「ヨハン、出来たよ。今日はサツマイモとカボチャのスープと、ササミだよ、さぁお食べ」

そう言つとおばあさんはヨハンの目の前に、猫の頭の形をした銀のお皿を置きました。

今夜のご飯はおばあさん特製のレシピ。ヨハンのお気に入りです。

「おいしいかい？」

「にゃ」

ヨハンは夕食を美味しく頂き、綺麗に完食しました。

(……あんまり食べ過ぎて、モウみたいにならないようにしないと)

——その頃モウ宅では——

「ヘックシッ！ (……誰か俺の噂してるな……俺も有名になったもんだ)」

……ちよつと勘違いしているようです。

——ヨハンはお腹がいっぱいになり、急に眠たくなってきました。

(今日もたくさん歩いたなあ……疲れたし、そろそろ寝ようかな)

暖炉の側に置かれた、おじいさんが作ってくれたベッドに移動すると、おばあさんが縫ってくれた毛布にくるまって、ヨハンは眠りに就きました。

晴れた満月の夜に

あれから一週間が経ちました。

晴れた日もありました、ほぼ雪が降り続いた一週間でした。

ヨハンは窓の外を見えています。

今は雪もすっかりと止み、綺麗な夕焼け空が広がっていました。

降り積もった雪が夕陽に照らされて、景色の全てを朱く染めていきます。その風景はまるで、地にオーロラを敷き詰めたような美しさでした。

ヨハンは目の前に広がる赤の世界に、しばらくの間、見入っていました。この季節の日の入りはとても早く、ほんの数分で空は暗くなりました。

星々が煌き輝き出すと、急に部屋の中へと月の光が射し込んできました。

今夜は満月です。

ケット・シーが住む国の、森の中の一本の大きな木の下で、また猫たちの集会が開かれます。

(……そろそろ行こうかな？ モウが待ってるかも)

「にゃーお」

ヨハンはいつものように、窓をカリカリと引っ掻きます。椅子に座っていたおじいさんは立ち上がり、ヨハンの側まで歩いていきましました。

「どうしたんだいヨハン、こんな夜中に散歩に行くのかい？」

「にゃー」

「今夜は雪は降らないみたいだけど、外は寒いよ？ それでも行くのかい？」

ヨハンはお座りをして、じっとおじいさんを見つめた後、「にや」と一言、返事をしました。

「そうか、じゃあ開けるからね……。そうだ、これをしていきなさい。ばあさんがお前のために編んでくれたマフラーだよ」

そう言うとおじいさんは、ヨハンの首にマフラーを巻いてあげました。赤いタータンチェックの、モコモコとしたマフラーはヨハンにとっても似合っています。

——ガラガラガラ

ヨハンはおじいさんに窓を開けてもらうと、月の輝く夜空の下へと飛び出しました。

「ヨハン、窓の鍵を開けておくからね。帰ってきたら自分で開けて入ってくるんだよ」
「にや〜う」

ヨハンはおじいさんに返事をする、小川に架かる小さな橋へと急ぎました。

橋にちようど着く頃、向こうからモウがのそのそやってきました。相変わらず牛のような猫です。

（……ちよつと太ったかな？）

一週間ぶりに再会したモウは、少しだけ大きくなったようにヨハ

ンには見えました。

「久しぶりだな、ヨハン」

「うん、久しぶり！」

「しかし綺麗だな……この景色、今のうちに楽しんどけよ！」

モウは辺りを見回しながら言いました。

「そうだね、次の満月は晴れるか分からないしね……まるで星空みたいだ」

雪の絨毯が月の光に照らされて、星屑を散りばめたように輝く風景を、ヨハンはそう例えると、

「……お前、上手いこと言うな」

とモウは感心しています。

「最初はまったく話せなかったのにな！」

「リリーとモウのおかげだよ、ありがとう」

「俺のおかげじゃねえよ……リリーの教え方が上手いんだろうよ。俺もリリーに習ったんだ」

「え！ そうなの？」

「ああ、すげースパルタだったのを……覚えてる……俺は物覚えがわりいからな」

遠くを見つめるモウは、ブルブルと震えています。

（そ、そんなにだったんだ！？）

「そんなことより、そろそろ行くぞヨハン……リリーを待たせて怒らせると厄介だからな」

「う、うん。そうみたいだね」

そうして二人は前に通った公園のトンネルへと急ぎました。

雪の積もる街を駆け抜け、トンネルのあった場所まで来ると、数匹の猫が立ち往生しています。

『ざわざわざわざわ』

二人は公園に集まる猫たちに歩み寄っていくと、立ち止まりざわめく彼らに、モウは聞きました。

「ん？ おいお前たち、どうしたんだ？ そんなところに突っ立つて」

モウの声を聞くとみんなが振り返り、その中の一匹の猫が言いました。

「あ、モウさん……トンネルが開かないんですよ」

「何だつて！？ ……ちよい見してみ。……うゝん、どうやらトンネルが埋まつちまつてるみたいだな。……よし、みんなで雪かきするぞ！」

モウの提案で、その場にいた全員で雪かきをすることになりました。

—— 20分後 ——

「……雪かきつてのは、意外に大変なんだな、ヨハン」

「……そうだね、疲れたよ……」

力持ちのモウでも、これはさすがにこたえたようです。ゼエゼエと肩で息をしています。

「お！ トンネル開いたじゃないか、よしみんな行くぞ！」

モウの掛け声で、みんな一斉にトンネルの中へと入っていきました。

「モウ、僕たちも急ごう！」

みんなに続いて、ヨハンとモウもトンネルをくぐります。

長いトンネルを抜けると、ヨハンは眩い光に目を瞑りました。

「モウ、前から思ってたんだけど、コッチの世界は昼なんだね……」
「ああ、コッチの世界はアッチの世界と昼夜が逆転してるん……んげっ……！」

「どうしたの！？ モウ」

モウが急に変な声を出したので、ヨハンは驚いてしまいました。

「ヨハン……あれ、見てみ……」

モウは視線をそらし、先の方を指さして言いました。

「ん？ ……あっ！」

ヨハンの視線の先には、切り株の上で腕を組み仁王立ちし、不機嫌そうな顔をしたリリーの姿がありました。

「あなた達……レディをこんなに待たせて、いったいどういづつもりなの！」

「あの、これにはわけ——」

ヨハンがそこまで口にしたところを遮って、モウが反論し始めました。

「しょうがないだろ、こっちもいろいろ大変だったんだ」

「何よ、その言い草は。……私たちがどれだけ待ったと思ってるの！ 1時間半よ、1時間半！」

「それがどうした。俺たちはな、20分も雪かきしてたんだ、こっちだって疲れてるんだよ！」

リリーとモウの口論は更に激化し、それは5分ほど続きました。

ヨハンは二人のやり取りを聞くに堪えられなくなり——

「二人とも、いい加減にしろよ！ ……僕はこんな口喧嘩を聞きに来たわけじゃないんだ」

ヨハンもついつい口調が強くなってしまいました。

「……！！」

「……ごめんね、ヨハン」

「……悪かったな」

ヨハンが止めに入ったことで、二人は落ち着きを取り戻しました。

「もっと仲良くしようよ、仲間じゃないか」

「……そうだな……悪かった、リリー」

「……なによ、悪かったのは私なんだから、謝る必要なんてないわ。……ごめんなさいね、モウ」

どうやら二人は仲直りしたようです。

気付けば、周りにいる猫たちは、この前に来た時よりも更に大人数になっていました。その数、ざっと見ても30匹以上。

「結構な人数が集まったようね……モウ」

「そうだな、そろそろいいんじゃないか？ ……とその前にリリー、ヨハンに説明があるだろう？」

「あつ！ そうだったわね。……ヨハン、少し長いけど、これから話すことをよく聞いて」

ヨハンは静かに頷きました。

そしてリリーは深呼吸をすると、ゆっくりと話し始めました――。

「……私たちが今いるこの世界は、ケット・シーと呼ばれる種族が暮らす世界なの。ケット・シーって言うのは、“猫の妖精”って意味よ。二本足で歩き、人語を喋る……それが私たちケット・シー。人間の中に紛れて一緒に生活している者……。この世界で生まれ、この世界で生活している者……様々ね。そんな私たちケット・シーは、王制を敷いているの。王様となった者はこの世界を統治するのが仕来りなんだけど……つい最近、王様がご病気で亡くなられてね。……だから次の王様の候補になりそうな人を探しているのよ。王様は選挙によって選ばれるから」

リリーはここで一息つきました。

「そうだったんだ。……でも王様に奥さんや息子さんはいなかったの？ いるんだったら後継者になればいいのに……」

ヨハンは少し気になり、リリーに聞き返しました。

「……ふう。問題はそこなのよ……。王子が生まれてからしばらくして、王妃様と王子は共にどこかへ行ってしまったらしいの。…いま生きているのか、死んでいるのかさえも不明なのよ」

リリーは困った顔をして、首を左右に振りしました。

「だからお前を連れて来たんだ、ヨハン」

モウはまるで出番を待っていたかのように喋り始めました。

「でもなんで僕なの？」

ヨハンはそこがとても疑問に思いました。

「初めてあの橋の上でお前を見た時、こいつは何かが違う……そう思ったから声をかけたんだ」

「私も……初めてあなたを見た時に、なんだか不思議な感じがしたの……一目惚れしちゃったわ、モウもなかなか見る目があるわよね」

二人ともべた褒めです。ヨハンは恥ずかしそうに俯きました。

「でも、僕に王様なんて、そんなの無理だよ」

「ヨハン、諦めるんだ……。リリーはこう見えても、王宮の秘書官なんだ。そのリリーがお前に決めたんだよ。きつといい線いくと思っぞ」

「そんな……」

モウに諦めろと言われて、ガツクリと肩を落とすヨハン。

「安心なさいヨハン。たとえ選挙で選ばれたとしても、王様直属の執事が認めなければ、王様になることはないわ」

「そうなんだ。僕が認められるわけないし……だったらなくてもいいかな？」

「よし、決まりね！」

リリーは、ヨハンが承諾してくれたことがとても嬉しかったようで、ピヨンピヨンと飛び跳ねています。そして、大衆に向かって宣言しました。

「みんな！ この地区の候補が決まったわ、彼の名はヨハンよ、応援して上げてね！」

——パチパチパチパチ

『おお、ヨハーン頑張れよ』

あちこちで拍手や声援が飛び交いました。みんな、ヨハンを認めてくれたようです。

「じゃあヨハン、あなたのことを色々と聞かせて！ 推薦状を書かなくちゃ」

そう言つとリリーは、切り株の脇に置かれた、可愛い花柄のカバンからペンと紙を取り出しました。

「え」と、名前はヨハンと……住んでるお家と家族構成は？」

「ログハウス風なお家で、おじいさんとおばあさんの3人暮らしだよ」

「へー、ヨハンはじいさんばあさんと暮らしてんのか」

とモウは興味深そうに聞いてきました。

「そうだよ、とても優しくて温かい人たちだよ。……モウは？」

どこか羨ましそうな表情をしているモウに、ヨハンは聞き返してみました。

「よくぞ聞いてくれた！ ヨハン聞いてくれよ！ 俺の家はデカくて遊びがいはあるし、飯も美味いから文句はないんだ。けどよ、あのガキンちよ……5歳の女の子なんだけどな、俺の眠りは妨げるわ、パンチしたら泣き喚くわ、尻尾で遊ぶわ、飴玉投げるわ……もう踏んだり蹴ったりってな感じでよ。……いつそコツチで暮らそかな」

少し涙目になりながら、モウは自分の家のことをヨハんに教えてあげました。

「アハハハッ！ 最っ高ねその子、モウはいじりがいがあるから楽しいんじゃない？」

リリーは大爆笑しながらモウに言いました。

「……勘弁してくれよ」

モウは肩を落とし、しょんぼりしています。

「じゃありりーは？」

ヨハンは次にリリーに聞いてみました。

「私はずっとコッチで暮らしてるから、人間に飼われたことないのよね。私の家は代々秘書官なの……父と母と姉がいるわ」
「へー、そういう家系なんだ」

ヨハンはとても感心しているようです。

「オホン！ 次の質問よ、ヨハンのご両親は？」
「あつ……。ごめん……。僕、覚えてないんだ。気付いたらおじいさんに拾われてた」

ヨハンは少し申し訳なさそうにリリーを見ました。リリーも聞いてはいけないうことを聞いてしまったと、後悔しているようです。

「そうなの……。ごめんね。んまあいいわ、そこら辺はなんとかなるでしょ。以上よ」

「ううん、いいんだ。ところで、それ持ってどこ行くの？」

「王宮に行って受付に提出するのよ。きっと今頃は各地の候補者が集まってるはずよ。急ぎましょー！」

王子……？

しかしリリーは、王宮に向かって駆け出そうとしたところで、急に足を止めました。

「どうしたの？ リリー」

「……ヨハンの服どうしようかしら？」

「そうだな。と言っても、今から仕立て屋に行っただとしても受付時間に間に合わないだろうしな」

リリーとモウは腕組をして、うぐん、と頭を悩ませています。

「モウの服はヨハンには大きすぎて着れないだろうし」

「まあ俺様の服は6Cだからな。ヨハンには無理だ」

「ろ、6Cもあるの？ ……私はてっきり8Cぐらいかと思ってたわ」

あまりの大きさに、空いた口が塞がらない様子のリリーです。

「そんなにねえやい！ って、“も”じゃねえだろ。予想のほうが大きいのになんで驚いてんだよ！」

「……それもそうね」

二人はまた腕組をして悩んでいます。

「ねえ、6Cとか8Cってなんなの？」

「ん？ ああそれはね、服のサイズのことよ。Cって言うのは、Catの略で、6Cっていうのは、つまりは猫が六匹くらい入る大き

さつてこと」

「へー、ってモウはそんなに大きな服着てるんだ」

サイズの大きさを聞いたヨハンは凄く驚いているようです。

「まあな！ どうだヨハン、俺の服を着ていくか？」

「む、無理だよ。ぶかぶかすぎて着れないよ」

ヨハンを半分からかって、モウは悪戯そうに笑っています。

「そんなことより、ヨハンの服よ、服！」

今度は三人で悩めます。うーんと唸り腕を組む二人を見て、ヨハンはあることに気付きました。

「今は二人とも着てないけど、着なきゃダメなの？」

「まあ選挙だしな。それなりにちゃんとした正装つてのが、俺たちケット・シーにもあるんだよ。まるで人間みたいだよな」

モウはヨハンにそう答えると、ネクタイを締めるマネをしておどけています。ケット・シーの世界にも正装があると知ったヨハンは、さらに緊張してきました。

と、二人の様子を見ていたリリーは、改めてヨハンを見つめます。

「どうした？ リリー」

「ちよつと黙ってて。うーん……」

ヨハンを上から下から、まじまじと見つめるリリーは一人で唸っています。

「リリー、恥ずかしいよ」

じっとリリーに見つめられ、ヨハンは恥ずかしそうに身をよじって、その視線から逃れようとしています。

「改めてみたら、すごく綺麗な毛並みよね。……このままでいいんじゃないかしら？」

「なに！？ そいつは……いいと思うけどよ、正装なしってか？ 賭けだな」

「だって、ヨハンはまだコッチの世界を知ったばかりなんだし、まさか正装があるなんて思いもよらなかっただろうし……それに時間がないし。よし、そうしましょ！」

リリーは手に持った推薦状の最後に言葉を書き足しました。

「はあ、ま、いつか。んじゃ早いとこ王宮に急ごうぜ！」

そうしてリリーとモウは、ヨハンを代々王様の住む王宮、ベルムーン城へと連れて行くことにしました。

集会所があった巨木の広場から北へ森を抜けると、そこには広々とした道路が整備され、城下町らしい賑わいを見せている大きな街がありました。

食べ物売っているお店、洋服売っているお店、はたまた武具を売っているお店など様々です。

そして一本道をさらに進むと、見えてきました。ベルムーン城です。

王宮独特のあの丸い屋根の部分は、猫の頭の形をしていて、ちゃんと目と口までガラス窓で作られていました。

東西にある塔のようなものは、猫の手のようになっていて、さら

には肉球まで再現されています。中庭はとても広く、色とりどりの花が咲き乱れ、風に運ばれ辺り一面に華やかな香りを漂わせていました。

王様を決める選挙当日ということもあり、中庭は沢山の人ばかりが出来ています。集まった彼らを尻目に、三人は王宮の中へと入っていきましました。

既に大広間には、各地域から推薦された、候補のケット・シーと推薦者たちが集まっていました。

「おお、結構いるな」

モウは、意外に人数が多いことに驚いています。

「私ちよつと受付に紙、出してくるわ！」

リリーは鞆から、ピッ！ と推薦状を取り出すと、受付へとその紙を持って走っていきましました。

ヨハンは改めて周りを見渡します。

広間に集まった候補らしき人物には、青い鳥の羽が衣服の胸元に付けられていました。その人数を数えてみると、十二人いるようです。

いずれの候補も、貴族のような家柄なのでしょいか、高貴な感じが見てとれます。

しばらくすると、受付を終えたリリーが戻ってきました。

「候補者はあなたで最後だつてヨハン、ギリギリ間に合ったみたいよ」

「……選挙なんだよね？ それっていつやるの？ いま？ ……みんな集まってないみたいだけど」

「選挙を始める前に、面接みたいなのがあるわ。一人ずつ執事と面

談することになってるの……ほら、もう受付順に呼ばれてるわ!」

そう言ってリリーが指差した方を見てみると、受付番号一番の猫が部屋へ入って行くのが見えました。

「ううゝ……なんか緊張してきたよ」

「安心しなさい、私も付いていくから」

「ホント!? よかったゝ」

リリーの言葉を聞いたヨハンは胸を撫で下ろし、大きく息を吐きました。よほど緊張しているようです。

「（扉の前までだけどね）……あら? ところでモウはどこ行ったのかしら……」

「そう言えばいつの間に」

二人は辺りを見渡しましたが、モウの姿がどこにも見当たりませんでした。

すると突然――

「キャアアアー!!」

と、甲高い悲鳴にも似た、驚いたような声が鳴り響きました。

「っ!? ……なんだろ?」

「ヨハン、行ってみましょ!」

二人は急いで声の聞こえた方へと走っていきました。そこはどうやら厨房のようです。入口の前で、メイドがオロオロとしていました。

二人は中に入ってみると、なんとそこには、大きな調理台の上で満足そうな笑みを浮かべながら寝ている、どこかで見たことのあるような模様の大きな猫がいました。

『……モウ！？』

そうです、牛猫です！ この牛猫は、今夜、候補者や推薦者らに振舞われるはずであったであろう料理を、すべて食べてしまったのです。この牛猫が……。

リリーは無言のまま寝ているモウに近付くと――

スパーン！！

と、いつ手にしたのか分からないハリセンで、モウの頭を思いっきり叩きました。

「んがっ！？ ……ん？ よおリリー、ヨハンも、もう終わったのか？」

眠たそうな目を擦りながら、モウは言いました。

「……もう終わったのか？ じゃないでしょー！！ あんた、何ぜんぶ食べちゃってんのよ！ 今夜のディナーよ、ディ・ナ・ー！」
「……ああ、美味そうだったから、ついな」

モウは、きれいに平らげたお皿を見て、ケラケラと笑っています。

「モウ、あんたは罰として、厨房でシェフの方たちのお手伝いしなさい！」

リリーはモウに対し、ビシッと指をさして言いました。

「なんでだよ、しょうがないだろ？ 腹減ってたんだから……」

モウはお皿を前足の上でクルクルと回しながら、ぶつぶつと文句を言っています。

「反論は許さないわよ！」

モウの物言いに対して、リリーの目がギラリと光ります。と同時に、ホールの方から――

「十三番のヨハンさん、お入りください」

と、ヨハンを呼ぶ声が聞こえてきました。

「あっ！ 僕の番だ」

「モウ、ちゃんと手伝うのよ！」

リリーはもう一度モウに念を押します。

「分かったよ……」

モウは嫌そうな顔をしながらも、リリーには敵わないといった様子で渋々OKしました。

「ヨハン、行くわよ！」

リリーはヨハンの手を引き面接が行われる場所、大広間の脇にある小部屋へと連れて行きました。

「ここよ、さあ入って」

ヨハンは一度深呼吸をし、ノックを二度鳴らします。

「よ、ヨハンです！ 失礼します」

ヨハンは緊張しながらも部屋のドアを開けました。

（……あつ）

ヨハンは目の前にいる人物に少々驚きました。
白くて長く、カールした立派なヒゲ。そして鼻にかけた丸眼鏡。

（この執事さん、ちょっとおじいさんに似てるかも？）

ヨハンは心の中で思いました。

「キミがヨハン君だね？」

と、その執事は、先ほどリリーが提出した紙に目を通しながら言いました。

「はい！」

「出身地とご両親の名前が書かれていないが、これはどういうことかね？」

ヨハンは執事の問いに、目を伏せながら答えました。

「ごめんなさい。僕、覚えてないんです……」

「覚えてない？ …… そうか、それは困った。 …… まあいいんだけど……ん？」

推薦状を見ていた執事はヨハンの方へ視線を戻すと、何かに気付いたかのように目を丸くしました。

「なんとなくだが……似ている、ような気がする。王子の……」

ぼそりと執事は呟くと、突然立ち上がりヨハンに近付いていきました。

（王子？ 誰が？ …… 僕が！？）

「ちよつと失礼」

そう言つて執事は、ヨハンの側までくると匂いを嗅ぎ始めました。

「……こ、この匂いは！ …… 間違いない。赤子の時に、王妃様に抱かせていただいた時と同じ香りがする！」

「え！ えっ！？」

ヨハンは何がなにやら分かりません。

「あなた様はアレン王子ではありませんか？」

「ア、レン？ …… 違います、僕はヨハンで——」

僕はヨハンです！ そう断言しようとしたその時、執事はそれを遮つて強く言いました。

「いいえ違います！ あなた様は、王妃様と突然、姿を消された

我が国の王子、アレン様に違いない！」

「……聞いてないし。……とにかく！ 僕はヨハンなんです」

「いいえ違います。じいの目は誤魔化されません。何故ならその容姿！ ……山猫のように鋭く尖った耳に、前猫王様譲りの端正な顔立ち、王妃様譲りの真っ白な胸のカラーと尻尾の飾り毛。……そして何よりの極めつけは、この匂い。昔抱かせていただいた時に嗅いだ匂いと同じ匂いがします！ ……間違いなくあなたはアレン王子。お帰りなさいませ」

そう言つと執事は深々と頭を下げました。

「うう……」

どうすれば分かつてもらえるだろう、とヨハンは困惑しています。

「とにかく、王宮を見て回れば何か思い出すかもしれせん！ ……

……さあ行きましよう王子」

「あ、あの執事さん」

「王子、わたくしの事は“じい”とお呼び下さい。……ああ、覚えていらっしやらないのでしたね。申し遅れました、わたくし、ロビンと申します。さあ行きましよう！」

ロビンは戸惑うヨハンの手を取ると、勢いよく部屋を出て行きました。

「あつ、ヨハンもう終わったの？ ……ってあれ？ 行っちゃった……いったい何なのかしら」

リリーはあまりの勢いに驚き、それ以上にも言えませんでした。

「さあ着きましたよ王子。ここがあなた様がお生まれになった、王妃様のお部屋です」

ロビンに案内されて入った部屋は、白を基調として、ピンクなど淡い色の家具でまとめられた美しいお部屋でした。

ヨハンは王妃の間へと足を踏み入れた瞬間、脳裏になにかがよぎるのを感じました。

(……何だろう、なんだか懐かしい感じがする)

「ホントにここが僕が生まれた所なの？」

「そうですよ王子。王妃様も猫王様も、ご誕生なされた時には、それはもうお喜びになって」

ロビンは遠い目をして、過去を思い出しているようです。

「さあ、他の場所へも行ってみましょう」

それからというもののロビンは、ヨハンを王宮のあちらこちらへと連れ回しました。

ロビンに案内され、王妃が大切にしていたという、中庭とは反対にある小さなガーデンへと着いた時でした。

「この香り……なんか、なんとなくだけど覚えてる。……そうだ！僕はよく母さんに抱かれてこの庭に来ていた！……思い出したよロビンさん」

「“ロビンさん”だなんてよそよそしい……王子、じいですよ！
じい」

「うっ……。じ、じい？」

少し恥ずかしそうにしながらも、ヨハンはロビンのことをじいと呼んでみました。

「はい！ …… そうですね、それはよかった。王妃様と共にいなくなられた時は、本当に心配いたしました。 …… もしかしたら、もう死んでしまわれたのかも思いましたよ。しかし、ご立派になられたお姿を見て安心しました」

「人間のおじいさんとおばあさんに育ててもらったんだ！ とても温かい人たちだよ」

「それはお礼をしなくてはなりませんね」

ロビンはニコニコしながら、うんうんと頷いています。

「ところでじい、母さんは……どこへ？」

「申し訳ありません王子…… わたくしにも分からないんです。探させてはいるのですが、どうやらこちらの世界にはいないようです」

「そうなんだ…… 無事ならいいんだけど」

ヨハンは寂しそうに言いました。

「そうですね、わたくしもそう思います」

二人してしばらくの間、王妃のことを思いました。

「…… っと、そうそう。王子がお戻りになられたという事は、今回の選挙は無しってことになりますな。 …… わたくしはその旨を皆に伝えて参りますので、王子は先ほどご案内した王の部屋へ行って装束に着替えてください」

「えっ、でも選挙で選ばれなきゃいけないんでしょ？」

「何をおっしゃいますか！ 正統たる王位継承権を持つ王子が戻ってきたのですぞ……誰も否定はしません」

「うーん……分かったよ。じいが言っんなら」

「ではわたくしは急ぎますので、王子もご用意を……それでは」

ロビンは丁寧な頭を下げると、急いで候補者と推薦者、そして投票権を持つ者たちの元へと走っていきました。

「僕も用意しなくちゃ。……えっと王の間は、たしか三階だったかな？」

ヨハンは長い廊下を歩き、螺旋状の階段を登り、そして王の部屋のある三階の赤い絨毯の上を歩いています。

廊下には、王と王妃、そして小さかった頃のヨハンの写真が額に入れられて飾られています。

生まれた時の家族写真、三人で川に魚を捕まえに行ったこと、父に剣術を教えてもらったこと、母の腕の中で子守唄を聞きながら安らかに眠ったこと……目を閉じると、本当に色々なことが思い出されます。

そうして遂に、ヨハンは王の部屋の前へと着きました。

「ここが代々の王の部屋……そして、つい最近まで父さんがいた部屋……」

ヨハンはゆっくりとそのドアを開けました。

新猫王アレン……そして――

そこはきつちりと整理整頓され、掃除の行き届いた綺麗な部屋でした。

窓際には大きな机があり、その上には赤い羽ペンとインクが、そしてワインのボトルとグラスが置かれています。壁際には本棚があり、兵法書から文学書、歴史書やガーデニングの本なども置かれています。

ベッドには皺ひとつない真っ白なシーツが敷かれていて、その脇に大きなクローゼットがありました。

「この中かな？」

ヨハンはクローゼットの扉を両手で引き開けました。するとそこには王冠と、赤い色をしたマントが綺麗に畳まれて置かれています。

「あつ、これだ！」

ヨハンはマントを手に取りそして羽織ると、次は王冠に手を伸ばしそれを取り上げました。
すると――

「ん？ ……手紙？」

王冠の下には、肉球で判を押された白い手紙が置いてありました。

「父さんのかな？ ……読んで、いいのかな」

ヨハンは、王冠の下に静かに添えられていた手紙を拾い上げると、そっと開きました。

——アレンへ——

この手紙を読んでいるという事は、お前が王国に戻ってきたという事だろう。

いや戻ってきていないのだとしても、そう願うこの手紙を記す。そして、私はもうこの世にはいないということでもある。

お前とエリーゼが共に行方不明になった時、私はどうしていいのかわからなくなった。

私はお前たちを探し続けた……しかし見つからなかった。それでも探し続けたが、私は程なくして病に倒れた。医者が言うには、不治の病らしい……長くはないそうだ。

……アレン、執事のロビンを大切にやってくれ。あいつはよくやってくれている。世話になった。

それと王宮に住まう者たち、民、友達……全てに感謝の気持ちを忘れるな。

そして、よい王様になってほしい。お前ならきつとなれるはずだ。私とエリーゼの、自慢の息子なのだからな。

頑張れ！ アレン。

父として、お前とあまり接してやれなかった私を、どうか許してほしい。

……さらばだ……我が愛しのエリーゼ、そしてアレン。

——ルガルルより——

その手紙には所々、涙で滲んだ痕がありました。

「……父さん……」

ヨハンは何故だか涙が溢れてきました。
あまり記憶にない父なのに。

「……父さん、僕が父さんの意思を継ぐよ」

ヨハンは、手紙に押された肉球判子に手を添えながら言いました。
するとそこへ、候補者らに王子が帰ってきたこと、そして選挙の
取り止めを伝え終えたロビンが、部屋へと入ってきました。

「アレン様、皆が納得してくれました」

「そっか……ありがとう、じい」

「どうなされたのですか？」

そう聞かれたヨハンは、手紙をロビンに手渡しました。

ロビンは渡された手紙を開いて、中を読み進めます。

「そうですか、ルガルル様が……」

ロビンの目にはうっすらと涙が浮かんでいます。

「アレん様なら、きっと立派な王になれますよ。わたくしもそう思います。……きっとエリーゼ様もそう仰られるに違いない」

と、ロビンは涙を拭いながら言いました。

「うん、がんばるよ！……そうだ、アツチの世界のおじいさんとおばあさんに挨拶したいんだけど……」

「アレん様、それは残念ながら出来ません。王になったら、もうアチラの世界へは行けないのです」

「そんな！……でも、仕方ないよね……二人にお礼、言いたかったな……」

「アレん様、皆が待っています。玉座の間へと行きましょう」

ヨハンは残念に思いながらも、決意を新たに玉座の間へとその足を進めました。

長い廊下の途中、ヨハンはおじいさんとおばあさんと暮らしていた日々を思い出していました。

（——おじいさんに拾われたのは、そう、大雪の日だったなあ。たぶん歩き疲れて倒れたんだろうか。気付いたら僕は、暖炉の前で寝かされていた。そして、おばあさんが僕にスープを作ってくれたんだ。最初は熱くてビックリしたけど、本当に美味しかった。……本当に、優しく、温かい人たちだったなあ。僕はこの恩を、決して忘れない……）

「アレん様、この扉の向こうが玉座の間です」

ロビンに話しかけられ気付いたら、もう玉座の間のすぐそこまで来ていました。

——ザワザワザワザワ。

扉の向こうからは、ざわめきが聞こえてきます。

「じい、僕はもう迷わない。行こう!」

「はい」

ロビンが勢いよくその扉を開けると、ヨハンは玉座へと堂々と歩いていきました。

『っ!! …… ヨハン!?』

その場にいたリリーとモウは、さすがに驚きを隠せないようです。

「おいリリー、なんでヨハンがあんな格好してるんだ?」

「知らないわよ。……って、まさか、行方不明だった王子って、ヨハンのことだったの!？」

「なにい〜!! …… ヨハンが王子!? …… って事は次の王様はヨハンなのか!」

二人は、まさか自分たちが候補者として連れてきたヨハンが、王位継承権を持つ唯一の王子だとは知りもしませんでした。

「オホン! 皆様お静かに……このお方が、前猫王様ルガル様と
そのお妃エリーゼ様のご子息で、新猫王様のアレン様である。アレ
ン様、一言どうぞ」

「皆さん初めまして、アレンです。まず、今日ここへお集まりいた
だいた候補者および推薦者の方々に、お詫びを申し上げます、ご足
労をおかけしてすみませんでした。僕は父の意思を継ぎ、この王国
の王となることを決めました。まだまだ未熟者ですが、みなさんど

うぞよろしく願います」

ヨハンは丁寧な頭を下げました。

「おいリリー、アレンってのがヨハンの本名らしいぞ！……俺たちどっちで呼べばいいんだ？」

「アレンが本名なんだから、アレンでいいんじゃない？」

二人の会話を聞いていたヨハンは言いました。

「そうだ、僕の大切な友人を皆さんに紹介したいと思います。……リリー、モウ、こっちに来て！」

二人は顔を見合わせると、ヨハンのいる玉座へと歩いていきました。

「まさかヨハンが王子だったなんて思いもしなかったわ」

「……まあ俺はなんとなく分かってたけどな……」

「嘘つきなさい、牛猫！」

モウの頭に、リリーの見事な猫パンチが決まりました。

「あはははっ！ やっぱ二人は面白いね！……皆さん、僕に言葉を教えてくれて、仲良くしてくれたリリーとモウです。……二人とも、これからもよろしく！」

ヨハンは二人を大衆に紹介します。

「こちらこそ、アレン様」

そう言っでリリーは頭を下げました。それを見たヨハンは首を横に振ります。

「リリー、僕たちは友達なんだよ。今まで通りに接してくれると嬉しいんだけど……」

「分かったわ、アレン！」

リリーはにっこりと微笑みました。

「俺は最初からそのつもりだぜアレン、よろしくな！」

「うん、二人とも、よろしく！」

程なくして、拍手が沸き起こりました。みんながヨハンを認めてくれたのです。

こうして無事、王位継承を果たしたヨハン……。

それから数日後――。

ヨハンは、母エリーゼが大好きだった庭を散歩していると――

「アレン！　俺そろそろアッチに帰るわ〜！」

と、突然走ってきたモウは言いました。

「そっか、でもまたコッチに来るよね？」

「ああ、また一週間くらいしたら来るからよ」

「よかった……。あつ、そうだ、ちよつと待ってて」

そう言っでヨハンは、何かを思い出したかのように急いで自室へと走っていきました。

——数分後——

「モウ、この手紙をあるお家に届けてほしいんだ……はい、これ地図」

ヨハンはモウに手紙と地図を渡しました。

「貸し、一つだからな、アレン」

モウは悪戯そうな笑みを浮かべています。

「今度、マタビケーキをご馳走するよ」

「おっ！ 話に分かるじゃねえか！ 安心しろ、ちゃんと届けてやるから。じゃあまたな、アレン！」

「うん、またね！」

ヨハンはモウに手を振って見送りました。

ヨハンは辺りを見渡します。

父と母が、共同で作り上げた小さなガーデン。鮮やかな花たちが、まるで寄り添うように、互いを尊重し合う様に咲き誇っていました。空を見上げると、キラキラと光る太陽が、今日も猫の王国を照らしています。ヨハンはしばらくの間、ゆっくりと流れる雲を眺めていました。

——その頃モウは——

「ん〜っと、ここが小川の橋だろ？ んで、そこから北東？ ……北どっちだ？」

方角が分からなくなったモウは、耳を澄まして風の声を聞きました。

——ヒュウウウウ——

「なるほど、北はあつちか……サンキュー。……ってことは北東はあつちだな！」

方角を確認したモウは再び歩き出しました。しばらく歩くと、ログハウス風のお家が見えてきました。

「ここがアレンが住んでた家か……俺の家の方がデカイけど、確かにあつたかそうな家だな」

モウは、木で出来たポストの中に手紙を入れると、ジャンプをして玄関のベルを鳴らし、走って逃げました。

「ん？ ……誰じゃろうか」

おじいさんは暖炉の前に置かれた木組みの椅子から立ち上がると、玄関へと歩いていきました。

そして玄関のドアを開けてみると……そこには誰もいませんでした。

しかし、いつもなら閉まっているはずのポストが開いていたことを、不思議に思ったおじいさんは中を覗いてみると、手紙が入っていました。

その手紙をポストから取り出すと、おじいさんは家の中へと戻っていきました。

「ばあさん、珍しいことに手紙が入ったよ」

「おやまあ、誰からだろうね？」

その手紙をよく見てみると、外には肉球の判が押されていました。

「（……ん？ この肉球は……まさかな……）」

おじいさんはなにか気付いたようです。

「ばあさん、開けるぞ」

そう言っておじいさんは手紙の封を切りました。

——おじいさん、おばあさんへ——

おじいさん、おばあさん、僕がいなくなったことを心配している
かとも思い……そして、お礼をしたかったので手紙を書きました。

僕は今、猫の王国にいます。そこで王様になりました。

幼い頃、あの寒い冬の日に、僕を拾って育ててくれて、ありがとう
ございました。

僕をここまで立派に育ててくれて、本当にありがとうございました。
このご恩は一生忘れません。

おじいさん、おばあさん、お身体に気をつけて、これからも二人
仲良く幸せに暮らしてください。

僕はもう帰ることは出来ませんが、お二人の事は、決して忘れま
せん。

本当にありがとう。

そして、さようなら。

——ヨハンより——

手紙を読み終えたおじいさんは驚きました。

「ばあさん！ ヨハンからの手紙だ」

「何を言ってるんだいじいさん。ヨハンは確かに賢い猫だったけどねえ、猫が手紙を書けるわけないだろうに……誰かが書いたんだろうさね」

「でもばあさん、これはヨハンだよ。ヨハンと書いてある……」

ぶつくさと呟くおじいさんに、分かった分かったと言わんばかりに頷くと、おばあさんは編み物を始めました。

「（……この肉球は間違いなくヨハンのものなんじゃ……。そうかヨハン、お前は元気でやっているんだね、安心したよ。頑張るんだよヨハン、わしはずっと、お前を大切に思っているからね）」

気が付くと封筒の中には、沢山のマタタビが入っていました。

——それから——

そんなこんなで、猫の王国の王様となったヨハン。
王になってからしばらくした後、ヨハンは友達であり、秘書官だったリリーと結婚しました。

二人は幸せに暮らし、ヨハンは良い王様として頑張っているようです。

……リリーに頭は上がりませんが……二人はとっても仲良し。

モウはというと……。

たまに遊びに来ては、厨房で料理を食い荒らし、リリーに怒られ、喧嘩をしてはヨハンに止められ仲直り。

みんないつもと変わらない……。

——ここは、そんな猫たちの王国——

新猫王アレン……そして——（後書き）

猫の妖精　くケット・シーの王国　を讀んでくださり、ありがとうございました！

参考にしたお話は『猫の王』という、イギリス各地に伝わる伝説です。

子供さんから大人の方まで楽しめるような、そんな温かい話が書きたいなと思い、思いついた童話がこの作品でした。

絵本のような感覚で楽しんで頂けたのであれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3604p/>

猫の妖精 ～ケット・シーの王国～

2011年11月15日09時14分発行